

## 裏切られる主

### マルコによる福音書 14 章 10～21 節

肅々と、その時が近づいています。そのことを主イエスのみ  
がご存じでした。弟子たちに、イエスさまはこれまで受難予告  
を旅の中で何度もしてまいりました。また今日の個所の直前、  
彼らがエルサレム滞在中の宿としていた重い皮膚病の人シモン  
の家で起きた記念すべき出来事、一人の女が近づき、イエスさ  
まに非常に純粹で薫り高い香油を注ぎかけたというベタニアの  
香油の出来事の際にも、そこでも主イエスは食卓にいた弟子た  
ちに対して、はっきりと、この女は前もって、わたしの体に香  
油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれたと書いてあります。世界中、  
どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人のしたこ  
とも記念として語り伝えられるであろう、と明言されました。

そして、日にちが一日進み、いよいよその日がやってまいり  
ます。除酵祭の第一日、すなわち「過越しの小羊を屠る日」と  
書かれています。この日の夜、ゲッセマネの園で主イエスは捕  
り手たちに引き渡されます。そして「過越しの小羊を屠る」と  
はイエスさまの十字架を説き明かすキーワードで、神さまとイ  
スラエルの民の原点に遡る出来事であり、現在のイスラエル民  
族にも多大な影響を与えた神の民の救いの記憶に関わるもので  
す。出エジプト記 12 章（111 頁）に「主の過越」という記事が  
ありますので、一部を朗読します。

ここで屠られた過越しの小羊が、家の中にいたヘブライ人の  
身代わりになりました。血は命をあらわしますので、そのしる  
しのついた家を主の使いは過越していった。つまり、彼らがエ  
ジプトでの奴隷生活から解放されるために先んじて小羊の犠牲  
があった。この解放を記念して、過越しの祭りが制定され、毎

年、イスラエルの民は過越しの食卓を守り続けてきた。これはハガダーという過越しの食卓の式文で、現在でもユダヤ人が全世界で用いているものです。主イエスの生きた時代から出エジプトは遡ること、1200年以上前の出来事ですが、彼らはそれを記念として守り続けており、過越しの食卓を囲むことで神の恵みと導きを思い起こし、ファラオの奴隷から解放され、主の民とされたことを喜ぶ。初めの恵みに立ち帰り、信仰を継承する儀式となったのです。祭りの意義は初めの恵みに立ち帰り、そこから力を頂くことですが、こういうみずからの原点となり、より頼むことの出来る救いの伝承を持っていることがユダヤ教、そしてキリスト教の強みであると申し上げたい。そして、いま時が来て、このイスラエル民族の救いの歴史に深く刻み込まれた食卓を、主イエスがさらに新しい意味をもったものに作り替えられます。このことは、また来週、「食卓の主」という御言葉の取り次ぎをいたしますので、そこで詳しくふれたいと願っていますが、ここでは12節にあります「除酵祭の第一日、すなわち、過越しの羊を屠る日」とあるのが、世の罪を取り除く神の小羊である主イエス・キリストの十字架の死を指し示していることを覚えて頂きたいと思います。

さて、今日与えられている個所で気になるのはふたつの出来事、ひとつは食卓の支度をする弟子たちの行動と、もうひとつはイエスさまを引き渡そうと考えるユダの行動です。今回、通して読んでいる関係で福音書記者マルコの出来事の積み上げ方の確かな構成、それらがもつ意味に気づかされます。第一は、過越しの食卓を用意に二人の弟子を遣わす記述ですが、これはエルサレム入城のときに、ご自身が乗られる子ろばを引いてこさせる時とまったく同じです。あの時も二人の弟子を遣わして、彼らが向かう先や、出会う人にどう受け答えするか細かい指示を与えています。今回は、それが過越しの食事をする食卓のあ

る部屋を手に入れるための指示となっています。そして弟子たちは、事柄がイエスさまの言う通りに運ぶことを体験し、食卓を整えます。これらの個所から明らかになるのは主が御計画に従って、ご自分の乗る子ろばや、食事をするための部屋と食材を手に入れられる。つまり、神さまがこれから起きる主イエスの受難を、過越しの出来事と重ねあわされてゆく。再三、明らかにされたように、メシアは軍事的な征服者、ローマに対する反乱の指導者としてではなく、平和の使者として来られ、ご自身をいけにえの羊として引き渡される方であることが、馬ではなく子ろばが用意される入城の仕方、また過越しの食卓が整えられるやはり不思議な仕方に、神さまの御計画、御心を見ることが出来る。決して偶然ではないということが明らかになる。それをわたしたちはここから見て取らなければならないでしょう。神の定められたことが決められたとおりになされてゆく。しかし、ここにひとつイレギュラーな出来事があります。それがユダの裏切りです。このユダの裏切りは 14 章冒頭に置かれている祭司長、律法学者たちがイエスを何とか殺そうとしていたという計略の記事と対応しています。ユダも裏切りを企てますが、その理由は何も記されていません。そして祭司長たちのところへ出かけて行って引き渡す算段をした。それを聞いて祭司長たちは喜んでユダに金を渡したということが書いてある。そして、舞台は過越しの食事の準備にはいってゆく。そこで、主イエスは二度にわたって、裏切る者がいると発言をなされた。18 節「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」。すると弟子たちは心を痛めて口々に「まさかわたしのことでは」と言い始めたという。ここもわたしたちには刺さる個所といますか、主イエスに従ってきた者たちが何かしら不穏な空気を感じ取っていて、イエスさまご自身から、あなた方の中

にわたしを裏切る者がいる、と言われた時に、それは自分のことではないかと疑ったというのは、これはある意味、正常というか、自分は従える、大丈夫だと思っていない分、健全な気がいたします。そういいながらこのあと、ペテロは勇ましいことを言ってしまう、イエスさまにつまづくことになるのですが、主の祈りの中で、我らを誘惑にあわせず、悪より救い出し給えと祈るように教えたことも、わたしたちの弱さを知り、何よりも信仰は本来、わたしのうちにはよりどころを持たない。神の憐みによって常に守られ、差し出される主の手をつねにつかむことによるものだと教えられます。一方で、この時、主イエスの手をもう掴もうとしていない人物がユダであったのでしょうか。信仰は神の招きであり、恵みであり、差し出される主の手を掴むこと、主の招きにわたしたちがどのように応答していくかをいつも問うのです。しかし、ユダはもうその招きに応えようとせず、自分で見切りをつけた。その動機が何であったかをマルコは明らかにしません。しかし、お金で引き渡すことを了解するまでになっている。呼びかけて応答する人格の世界から排除して、イエスさまをお金に、モノの世界に落とそうとしている。ユダの裏切りを分析することはなかなか難しいです。あまりに聖書のテキストが多くを語らない、特にマルコによる福音書はそうなのです。ただわたしがここで注意を促したいのは、ユダは機械的に、まるで舞台俳優のように、イエスさまを引き渡すという神さまの受難予告を担わされた操り人形ではないということです。ここは指摘しておきたい。つまり、主イエスを載せる子ロバであるとか、彼らが最後にする過越しの食卓の準備であるとか、そういう乗り物や、舞台となるものはモノの世界なのです。それについては、イエスさまは的確に予告をなさり、事柄はそのように動きました。しかし、弟子のひとり、ユダの裏切りをイエスさまは予定しておられたのではありません。こ

れはユダ自身の決定なのです。神が、人の意志を操り、道具のように扱うことはありません。この過越しの食事の席で、イエスさまがわたしを裏切ろうとする者があなた方の中にいる、と言われたのは、これは回心への招き、わたしは、あなたのしようとしていることを知っているのだ、と告げて、ユダがそのことを思い止まるように促されたのです。ユダの企みがなくとも祭司長や律法学者たちはいずれかの手を使って、事柄をなしたでしょう。わたしたちは、この個所で、直前のベタニアの香油を注いだ女との対比で、神さまに応答するとはどういうことかを考えるように促されているのです。マルコは、この個所でイエス様の言われたことが対（つい）になるよう構成しています。「はっきり言うておく、福音が宣べ伝えられるところではどこでもこの女のしたことは記念として語り伝えられるであろう」という女の献身へ向けた賞賛と、「はっきり言うておく、人の子は聖書に書いてあるとおりに、去ってゆく。だが、人の子を裏切るものは不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった」、この嘆きは、福音が宣べ伝えられるところではどこでも主を裏切り、売った者として記憶され続けることになるユダへの憐みに満ちた嘆きであるからです。最後の食卓においても、裏切ろうとする者に向けられた声かけ、お前はそれでよいのか、という招きをなさる救い主の姿に、一人も滅びるのは御心ではない、という主の変わらぬ慈しみと愛があります。迷ったとき、疑うときにこそ、この主の招きの言葉を自身に問いたいと願います。

お祈りいたします。